



勇者様にいきなり
求婚されたのですが 2

富樫聖夜

Seiya Togashi

RB

レジーナ文庫

レナス：神官

王様

レベル : 52
保有スキル : なし
アーリアが暮らす
シュワルゼ国の王。
ルイーゼの父。

ミリー：女盗賊

ファラ：女戦士

ルファーガ：
エルフ

リュファス：
魔法使い

ルイーゼ：
シュワルゼ国
第二王女

宰相

レベル : 50
保有スキル : 不明

シュワルゼ国宰相。
泣く子も黙る、
通称「氷の宰相」。

アーリア

レベル : 1
保有スキル : 「ツッコミE」。
《隠しスキル》

ルイーゼ姫付きの侍女から、
「勇者の婚約者」にジョブチェン
ジ。初めは傍観者を決め込み、
グリードを敬遠していたが……

グリード

レベル : 測定不能
保有スキル : 「精霊の加護」、
「魅了術」その他
いっぱい。

歴代「最強」で「最凶」の勇者。
無表情で何事にも無頓着だが、
アーリアにだけはご執心。

登場人物
紹介

目次

勇者様にいきなり求婚されたのですが2	7
運命的な出会い side リユファス	273
家族	311
書き下ろし番外編 勇者の調教	351

勇者様にいきなり求婚されたのですが2

1 「お守り」という名の魔具

勇者様の恋物語は、私たちが下々の者が読む小説『勇者物語』の大きな見せ場の一つになっっています。

ある勇者は、魔族に攫われた姫と恋に落ちました。

ある勇者は、固い絆で結ばれた幼馴染の少女と結ばれました。

ある勇者は、仲間である女戦士と、またある勇者は、魔族に狙われ助けを求めてきた少女と。

どの話にも共通しているのは、勇者様はひとたび恋に落ちると、どんな障害があっても乗り越え、ただひたすら一人だけを愛するということです。

恋敵が現われても、自分に懸想する意地悪な姫が現われて無理難題を言おうとも、ただただ愛しい彼女だけを求めます。

そんな一途な恋物語に、女性は誰もが憧れるのです。

そして当代の勇者であるグリード様を選んだのは——容姿も十人並み、存在感もあつてなきがごとしな、侍女A。

平凡な、どこにでもいる女性。

お話の中ではいつも、名前を呼ばれることがなく、「侍女たち」と括られる、とりたてて個性のない、場の賑やかし要員として配置されるだけの存在——

勇者様が恋をしたのは、なぜかそんなモブキャラでした。

……ありえない。

当の侍女Aこと私、アーリア・ミルフォードは思いました。

私と勇者様が結婚？ そんなのあり得ない。周囲のみんなが認めても、私自身が認められません。

ええ、誰が何と言おうと絶対……！

けれど私の手首には、グリード様に贈られた腕輪が燦然と輝いています。無理矢理はめられて、抜けなくなった婚約腕輪——いえ、お守りの腕輪です。

このせいで私は周りから、「勇者の婚約者」と誤解されてしまったんです。結婚を承

知した覚えなんてまるでないのに！　これのせいで……！

……何か外す方法はないのでしょうか。

そう思いながら私は、自室を出て姫様の部屋に向かいました。

侍女の朝は早いです。

私は基本的に日勤で、主であるルイーゼ姫様が朝起きてから夜寝るまでのお世話をします。姫様が起きる前に夜勤の侍女から仕事の引継ぎをし、他の日勤の侍女たちと申し合わせをして、かつ姫様の着替え一式を用意しなければならぬので、朝はのんびりしていられません。

「おはよう、アーリア」

姫様のお部屋に向かう途中、侍女仲間のペリンダにばったり会い、話をしながら歩いていました。ペリンダの話題は主に、勇者グリード様と私の婚約です。

「結婚式には絶対に呼んでね！　私、エリユーシオンへ一度行ってみたかったの！」

ペリンダの中では、私がグリード様と結婚することがすでに決定しているようです。そして、結婚式をエリユーシオンで挙げることも。

これは皇子であるリユファス様とご婚約中の姫様がエリユーシオンへお嫁に行かれる時に、私を連れて行くと言ったからでしょうけれど。それにしても、私はこの結婚に乗り気じゃないって何度も言ってるのに、どうしてペリンダがそう思い込めるのか不思議でなりません。

「私は結婚を承知した覚えは、これっぽっちもありませんが！」

「いいの、いいの。分かってるんだから。私は、あなたが勇者様と結ばれると確信しているの」

「いったい何の根拠があって、その確信とやらが……」

「結婚式はどんな風になるのかしらね。派手婚？　地味婚？　あ、もしかすると姫様の式のどさくさに紛れて、気がついたらアーリアも勇者様と結婚式を挙げてた……なんて展開もあり得そう」

「ちよ、それ、シャレにならないから！」

気づいたら結婚させられていたなんて……本当にそうなりそうで怖い！

そんなことになる前に、一刻も早くこの腕輪を外してもらわなければ！

私は決意を新たにしました。

考えてみれば、お守りの腕輪など必要なのは。この城には結界が張られているので魔族は入ってこれないし、人間の悪者が近寄ってきたとしても、城のみんなが守つ

てくれますから、何ら危険なことはありませんよね？

先日は、「狙われている」という言葉にびびり、腕輪をはめておくことをつい承知してしまいましたが、城内でいつものように仕事をしていれば、危険な目に遭うことはほとんどありません。

それに、この婚約騒動が落ち着けば、誰も私になど注目しなくなるだろうと思うのです。つまり私の結論は、身の安全のためにはむしろ、お守りがない方がいい、ということですよ。

……こうなったら、昼休憩の間に急いでグリード様に直談判するしかありません。

私が結婚を嫌がっていることを王様や宰相様たちには知られたくないので、なるべく城の人間がいなくて、かつグリード様と二人きりになることを避けられる場所で話し合わねば……

私はそんなことを考えながら、王族や賓客が居住する棟——私たちはそこを主居館と呼んでいます——へと続く回廊に足を踏み入れました。が、回廊から見える中庭の一角に件の人物の姿を見つけ、思わず足を止めました。

淡い金髪。白いシャツに、黒いズボン。そして腰に剣を下げたその人はまぎれもなく、勇者グリード様です。

「あれ、グリード様じゃない？」

私の視線の先に気づいたベリンダが言いました。

「ええ。……あんなところで何をなさっているのでしょうか」

そうなんです。グリード様は中庭に佇んで、何やら空を見上げているのです。けれど、そこにはただ空があるだけでした。

物思いにふけっているのだとしても、空を見上げる理由が解けません。そういう時、普通は俯くものですよ。となると……あれですか、猫が時々、じっと「空」を見つめているようなものでしょうか。

その時、ふと視線に気づいたららしいグリード様が、私たちの方を見ました。

「アーリア」

無表情だった顔がふっと綻びます。それを見て隣のベリンダがポツと頬を赤らめました。……ベリンダったら婚約者がいるくせに、いいんですか？

「おはよう」

にっこり笑いながら、足早にこちらへ向かってくるグリード様。

「勇者様の笑顔なんて、朝からいいもの見たわ。素敵な一日になりそうな予感がある」
うっとりとおぼやくベリンダ。反対に私のほうは、嫌な一日になりそうな予感がある

んですが……

「おはようございます、勇者様！ あ、アーリア、私は先に行つてるから」
ベリンダは元気に挨拶して、いきなりそんなことを言いだしました。

気を遣っているつもりでしょうか。そんなのはいいから、ここにいって欲しいんですが。勇者様と二人きりにしないでえ——！

と、いうようなことを目で訴えたのですが、ベリンダに思いは届かず、

「大丈夫、少しくらい遅れても。私が代わりに引継ぎしておくから」

などと訳知り顔で言い、片目をパチンと瞑って、去って行ってしまったのでした。

後に残されたのは、回廊に佇む私と、こちらに歩いてくるグリード様のみ。

ちよ、こんないつ人が通るか分からない微妙な場所で、二人きりにされても困るんですけど!?

……けれど、考えてみれば、これはいい機会なのかもしれません。

幸か不幸か、ここには今、グリード様と私しかいませんもの。腕輪を外してほしいと直談判する絶好のチャンスです。

「あの、グリード様！」

私は回廊から中庭に一步踏み出し、声をかけました。

「この腕輪のことなんですけど！」

そう言いながら左腕を上げた時のことでした——

いきなり、ぐいっとものすごい力で腕を引っ張られたのです。

傾ぐ私の体。

え？ と思う間もなく足が浮きあがり——自分の体が猛スピードでグリード様のもとへ突っ込んでいきました。

「なななな——!?!」

ぐいっと引っ張られざまに思いっきり放り投げられた、そんな感じです。

そしてそのままグリード様に衝突——するかと思いきや、私はグリード様の腕の中に抱きとめられたのでした。

……これはいったい何事？

私は何が起こったのか分からず、呆然としていました。

確かにグリード様はこっちに近づいてこようとしていましたし、実際ほんのすぐ傍まで来ていたのです。けれど、どんなに手を伸ばしても届く距離ではありませんでした。もしかすると今のこの状況のように抱き締めようとしていたのかもしれないんですが、物理的に無理でした。なのに、グリード様の意思を反映するかのように何か強い力によって

引っ張られ、私はグリード様の腕の中へダイブしていったのです。

「アーリア、どうしたの!？」

私の叫びを聞きつけたのでしよう、ペリンダがすっ飛んで戻ってきました。が、グリード様の腕の中にいる私を見ると、あらあらまあまあ、と言わんばかりの表情になって言うのでした。

「もう、朝から熱い抱擁^{ほうよう}を交わしちゃって。ラブラブなんだからあ」

「え？　ちょ、これは違いますよ!」

私は慌ててグリード様の腕の中から抜けだしました。

「あら、照れなくてもいいのよ。でも、こんなところで抱き合うのはさすがにマズイと思うわ。公共の場なんだし。そういうのは自室でやらないと」

「だから違いますって!」

「じゃあ、今度こそ先に行ってるね。お二人さん、ほどほどにね」

「だから人の話を聞け——!」

けれどペリンダは、わざとかと思うくらいに私の言葉を綺麗にスルーして、ふたたび行ってしまったのでした。

またしても後に残されたのは、訳も分からず気まずい思いをしている私と、相変わら

ずにこにこ笑って私を見ているグリード様。

自分から飛び込んでいったなんて思われたくない私は、とりあえず腕輪の件は保留にして、この不思議な現象について訊^きねることにしました。

「グリード様、今何かやりましたか?」

どう考えても、変な力が働いてましたよね?　だって明らかに引っ張られましたもの!

けれどグリード様は首を横に振ります。

「いえ、何もやってません。今のは腕輪の力によるものです」

「う、腕輪?」

「そうです」

いえ、にっこり笑って「そうです」じゃなくてですねっ!

「腕輪の力って、何ですかっ!」

私は思わずグリード様に詰め寄っておりました。

「婚約腕輪ならぬ、お守りじゃなかったんですか!」

ですが、そう言いながらふと思い出したのです。グリード様がこの腕輪を私にはめた時に言っていたことを。

『魔具です。お守りがわりですよ』

……そうでした。お守りの名を借りた魔具でした、これは。

魔具とは魔法を封じ込めたものですから、変な力を有していてもおかしくないのです。おかしくはないのですが……

「そういうのは最初から説明しておいて下さいよ！」

いきなり魔法の力が顕現するなんて怖すぎるでしょう!? 身につけているのは私ですよ!

このまったく訳分からん力はいったい何? 説明しろ——!

「これは、腕輪にかけられた『祝福』の魔法で……」

とグリード様が口を開くと同時に、ベリンダが去って行った方角——つまり主居館パラサスの方から声が聞こえました。声の感じからいって、夜勤あがりの女官か侍女でしょう。

「あー、ようやく夜勤が終わったわ」

「やっぱり一晩中はキツイわね。早く寝ようっと」

私は思わずゲツとつぶやいてしまいました。

こんなところを見られたら、何を噂されるかわかったもんじゃありません。仕事をサボってイチヤイチャしているなんて言われたら、泣くに泣けませんよ。

……実は、勇者様と縁を結びたがっている王様や宰相様の手前、表立って言う人はあまりいませんが、私をやっかんんだり、よく思っていない人は大勢いるんです。特に女性、中でも容姿に自信ありの女性たちです。

そんな人たちにこんなところを見られでもしたら、何を言われることやら……とりあえずここは逃げるべし、です。

「グリード様。私は仕事があるので失礼します。また後で伺わせていただきますね！」

私はそう言って、サッとグリード様から離れました。話を中断して申し訳ないですが、保身に走らせていただきます。職場環境は大事ですので!

そして私は、グリード様に引き止める隙どころか何か言う間も与えず、そのまま走り去ったのです。

「いつてらっしゃい。また後で」

——そんな言葉が背中にかかった気もするのですが、定かではありません。

足早に姫様のお部屋に向かいながら、私はふと思いました。

……そういえば、グリード様はあんな人気ひとけの少ない中庭で朝早くから何をしていたのでしょうか。

2 死が二人を分かつまで

グリード様にはめられた婚約腕輪は、実はまじないの腕輪でした——
その呪い、いえ祝福の魔法の効果に比べたら、抜こうとしても抜けない仕組みになっ
ていることなど可愛いものです。

腕輪に込められた効果とやらを私が知ったのは——いえいえ思い知らされたのは、そ
の日の昼のことでした。

私は昼休みの時間を利用して、グリード様の部屋に向かったのです。勇者の婚約者へ
と強制的にジョブチェンジさせられたこと、腕輪が外せないこと、そして今朝の不思議
な現象について、抗議するつもりでした。

向かった先は、グリード様専用を整えられた私室ではありません。いくら私でも、同
じ間違いを二度も犯しませんよ。

この時の私は、勇者様ご一行が気兼ねなく集まれるようにと与えられた居間に向かっ
ていたのです。
侍女たるもの、どんな場合も礼儀を忘れるわけにはいきませんから、飛び込んでいき
たい気持ちもグツと抑えて、居間の扉を控えめにノックしました。

「どうぞ」

中から聞こえたのはグリード様の声です。どうぞやら、ここにいることは確かなようです。
「失礼します」
私はお腹にくつと力を入れ、臨戦態勢で足を踏み入れました。

国の賓客である勇者様たちに与えられた居間は、さすがに広くて豪華でした。大きな
大理石のテーブルが中央に置かれ、部屋の至る所に備え付けられているソファは一目で
最高級品と分かるものです。ワゴンに置かれた茶器セットは言うに及ばず。……あれで
お茶を淹れたら私、きつと手が震えますね。

おっと、思わず趣味であるお茶のワゴンに先に目がいつてしまいました。目的は居
間でもお茶セットでもありません。グリード様です。

そのグリード様は窓ガラスの前に立っておられました。けれど部屋にいたのは彼一人
ではありません。他にも、魔法使いでエリユーシオンの皇子でもあるリュファス様、そ

して女戦士であるファアラ様がいて、ソファに座っていらしたのです。ですが、この時の私の目に映っていたのはグリード様だけでした。

もちろん、色気や甘酸っぱい理由からではありません。標的の確認というか、照準合わせ的な、非常に好戦的な理由からでございます。

「グリード様！」

私は挨拶もそこそこに、ズカズカと迫りました。

「今朝のアレはなんですか？ 説明して下さい！ ていうかこの腕輪、できれば外してもらえませんか？ それが無理なら、せめて右腕に着けかえて下さい！ 魔具なら左腕でなくて右腕でもいいはずですよね！」

畳み掛けるように言いながら、左手首を掲げてグリード様に近づいた時のことでした——それがふたたび起こったのは。

グリード様との距離が三メートルほどに縮まった途端の出来事でした。

今朝と同じように、腕輪をつけたほうの手首が何かの力にぐいっと引かれて、体勢が崩れた、と思ったら足が浮いていたのです。

浮いて、そのまま私の体は奇妙な引力に引っ張られて——気づいたら、グリード様の胸の中に飛び込んでおりました。

やっぱり今朝のあれは気のせいでも何でもなかったのです！

——ところで皆様。胸に飛び込む、と聞いてどんな光景を思い浮かべていますか？

ふわりと体が浮き、ふよーんと移動して、グリード様の胸に行き着いた？

……いえいえ、とんでもない！

喩えとして効果音を挙げてみるならば、「ピッターン」という感じでしょうか。足が浮いたと思ったら、そのまま弾丸のように勇者様の方に飛ばされていたんですよ！ ピッターンって！

まるで磁石のように！

これにはリユファス様もファアラ様もびっくり仰天しておられました。リユファス様なんて、完全にソファから立ち上がってます。でも一番驚いたのは、私本人です。驚きを通り越して呆けてしまい、どことなく満足気な様子の勇者様の腕の中でポカーンとしておりました。

それにしても、さすが勇者様。朝もそうでしたが、私が文字通り胸にダイブしてもビクともしませんでした。ピッターンなのに。筋肉すごいみたいです。細マッチョなんでしょう。まあ、予想して待ち構えていたから、というのもあるでしょうけど。

って、問題はそうじゃなくて！ いえ、それもあるけど！

「いったい、今の現象は何なのでしょう!? 察するに恐らく、いや十中八九、腕輪のせいなのでしょうけど！」

「うむ……」

呆然とする私をよそに、驚きの衝撃から立ち直ったご様子の方アラ様が首をかしげて仰いました。

「私はこういう色恋沙汰に縁がないのでよくは知らないが……昨今の婚約腕輪にはずいぶん面白い仕掛けがしてあるものだな」

「そんな訳あるか」

すかさずそうツッコんだのは——なんとリュファス様でした。私が内心でツッコミをする間もないほどの早業でございました。

「婚約腕輪に、こんな魔法が封じ込められている訳がない！」

「そうか、これは特殊なのか。ということは、リュファスが姫に贈ろうとしている婚約腕輪にも、そんな機能はない訳だな？」

「当たり前だ！」

今、私の目の前ではどうやら、方アラ様とリュファス様のポケとツッコミが展開されているようです。

……何か悔しい気がします。そこはかとなく負けたような……。何なのでしょうか、この敗北感は。

それにしても、女戦士の方アラ様……実は天然ですね? 「私はこういう色恋沙汰に縁がないのでよくは知らないが」つていうさつきみの台詞、わざとでも冗談でもなく、本気で言っていましたよね?

美人で強くて、でも天然だなんて……なんて美味しいキャラなのでしょう!

勇者様はじめ、見目麗しい方々揃いのご一行様。もちろん方アラ様も美貌の持ち主です。

すつと通った鼻筋に、長い睫毛、流れるような黄金の髪に、切れ長で青灰色の目を持つ麗人。

落ち着きのある雰囲気と、その言葉遣いとがあいまって、非常に中性的な印象を与えるお方です。要するに凛々しいのです。

勇者様のお仲間になる前は、セルフィダという北方の国で騎士をしていらしたとのこと、城内では武装を解かれるグリード様と違い、常にアーマー姿の方アラ様。寝る時以外は鎧をまとっていることが常だったので、鎧なしでは落ち着かないとか仰っておられましたっけ。

そのくすんだ金色の甲冑を身につけて颯爽と歩く姿は、女性と分かっていても見惚れてしまうほどです。だからでしょうか、実は侍女たちにとっても人気が高いのです。

天然であることが知れ渡ったとしても、「キヤー。素敵、可愛い！」って感じで受け入れられるでしょう。おそらく熱烈に。

「今のはレナスの神聖魔法だ。私は神聖魔法については専門外だが……『祝福』の一種だと思っ」

リュファス様はそう言って、私を抱きとめたままのグリード様に、うろんなまなざしを向けました。

「その腕輪にレナスの『祝福』を授けさせたな、グリード」
「ええ」

と、あっさりうなづくグリード様。

「対の腕輪ですから、神官の『祝福』はつきものでしょう？」

『祝福』とは、神官たちが儀式の時などに使うまじないの一種です。その効力は、神官の力量によって異なります。

例えば、「無事に目的地まで着けますように」と神官が『祝福』を授けたとしましょう。あまり力のない神官によるものだったら、効果は気休め程度にしかありません。ない

よりはマシという程度のもんです。

ところが、力のある神官が授けた『祝福』ならば、無事に目的地へたどり着く確率がぐんと上がります。盗賊や魔物に遭遇してしまう「エンカウント率」が大幅に下がるのです。

レナス様は勇者様ご一行の旅に同行するくらいですから、もちろん力のある神官なのでしょう。そのレナス様が与える『祝福』とは――

強力なものであることは、訊かなくても分かります。ええ、分かれますとも。

分からないのは――この意味不明な『祝福』の効果です！ なんじゃこりゃ、って感じですよ！

「その『祝福』に何か意味はあるのか？」

私が訊ねたかったことを、リュファス様が口に出されます。

「レナスの神聖魔法だけじゃなく、何か手を加えただろう。お前の魔力が混じってる」

「『死が二人を分かつまで』って、いい言葉ですよね」

グリード様はリュファス様の質問には答えず、私を見下ろして微笑みながらそう言う
と、次はリュファス様に視線を向けました。

その時には、笑顔はきれいさっぱりなくなっていました。

「この仕掛けは必要なものです」
 淡々とした口調。何の感情も窺い知ることのできない、あのガラスのような目をリュ
 ファス様に向けて、グリード様は言葉が続けます。

「いつかは分かりませんが、ですが、コレが必要になる時がきます」

「【天啓】か……?」

眉をひそめるリュファス様。

「そうです」

私には、お二人が何を言っているのか理解不能でした。

天啓。恐らくスキルのことだと思えますが、どういうスキルかは不明です。多分、一
 般的なものではないでしょう。さすが勇者様、いろいろなスキルをお持ちのようで……

——って、問題はそんなことではありません！ この怪しい現象が問題なのです！

「結局コレは何なんですか！ 説明して下さい!!」

私の絶叫が居間に響きわたりました——

3 祝福の……いや、呪いの腕輪でした

そうして受けた説明によると——

これは、レナス様が授けた『死が二人を分かつまで』なんていう訳の分からない『祝
 福』の魔法で、腕輪をつけた二人を引き合わせる性質を持つものらしいのです。

……それは祝福というよりもむしろ、呪いでは？

そう思った私を誰が責められますか。なんとという、はた迷惑な『祝福』。

恨んでいいですか？ いいですよね？ だって、とんでもない仕掛けだったので

すよ！

なんでも、私のと対になる腕輪を持つグリード様の近く——半径約三メートルの圏
 内に入ると、自動的に引き寄せられる仕掛けになっているとか。

どっちがどっちに引き寄せられるかは、魔力の値によって変化する代物らしいのです
 が、魔力皆無の私と絶大な魔力持ちである勇者様が近づきあった場合は、私が一方的に
 勇者様に引つ張られることになるのだとか。

釣り合いのとれた魔力の持ち主同士だと、お互いに引力が働くので、ピッターンはいそいで……

そして、魔力がある程度ありさえすれば、この腕輪も簡単に抜けるようになっていのだと、リュファス様は言われました。だからグリード様は、簡単に自分の腕輪を取り外してできるのです。ですが私は……

魔力のないことが、つくづく恨めしい。魔力なんて必要ないと思ってきましたが、今は切実に思います。魔力、欲しかった……！

ただ幸いなことに、この引力が発動するには数秒の間があるので、その際に三メートル圏内から脱出すれば、ピッターンはないそうです。

さらに、勇者様の半径一メートル以内では、引き合う力は無効になるとのことです。そんな至近距離で無効になっても少しも嬉しくありませんが……

今朝、私が腕輪によってピッターンとなった後、ふたたび引き寄せられることなくグリード様の腕の中から抜け出ることができたのは、このためでした。

もちろん今も、私はグリード様の手を振りほどき、猛ダッシュで離れさせていただきましたとも！

もう、ピッターンはありませんでした。

要するに、忌避すべきピッターンが起きるのは、グリード様の周囲半径一〜三メートルに近づいた時なのです。

だったらグリード様に近づかなければいいと思いますよね？ それでしたら喜んで実践したいところですが……ところが、腕輪の効力はこれだけじゃないのです。

なんと、勇者様からある一定以上離れると、とある仕掛けが発動するらしいのです！ ある一定の距離って!?! とある仕掛けって!?!

鬼気迫る顔でリュファス様に訊ねた私ですが、いかに最強クラスの魔法使いであって、専門外の神聖魔法のことは分からなかったようで、謝られてしまいました。

「申し訳ない。なにしろレナスの『祝福』にグリードの魔法が干渉している状態なので、【解析】しづらくなっている……」

私、一国の皇子に頭下げられています。侍女なのに。畏れ多いことです。

皇子としてではなく、勇者様ご一行の魔法使いとして謝っておられるのでしようけど、腰が低すぎやしませんか、リュファス様。王族なのでから、ふんぞり返っていてもいいんですよ。

侍女意識が染みついて身としては、非常に居心地が悪いです。むしろ私が謝りたくらいです。主君の婚約者に頭を下げさせるなんて、あつてはならないことです。

「いえ、リュファス様のせいではないのですから、謝っていたたく必要はございません」
私は首を横に振りながら言いました。本当に謝罪すべきなのは、この部屋にいるもう一人のお方ですよ、ね？

そのもう一人のお方は、リュファス様が説明してくださっている最中も今も、私と密かな攻防を続けておられます。できるだけ近づかないようにする私と、近づこうとするグリード様の、じりじりとしたせめぎ合いです。

グリード様が一步近づこうとするたびに、私が一步下がる。そんな感じですよ。

「グリード……」

リュファス様は呆れ顔です。女戦士のファラ様はソファに座ってお茶を啜りながら、傍観を決め込んでおられます。

「微笑ましい光景だな」

「微笑ましい？ 私は必死ですよ！」

私は必死ですが、勇者様は楽しそう……というよりも嬉しそうです。にこにこ笑って、私との距離を縮めようとしているんです。

勇者様ですから、もちろん近づこうと思つたら簡単にできると思っただけですよ。でもそうはせずに、純粹に追いかけて楽しんでるようなんです。

一見、猫がネズミをいたぶっているかのよう……。いいえ、むしろワンコが尻尾を振ってジャレついているかのような印象を受けるのは、気のせいでしょうか？

そんな様子を呆れ顔で見ているリュファス様ですが、彼の持つスキル【解析】により、腕輪にかけられた魔法の正体を調べてくださっていたようです。

「二人の腕輪を触れ合わせると、腕輪の効果を相殺することができるようだ。一定の時間のみだけ」

リュファス様は、かけられた魔法がどういふものか分析したり、解く方法を探ったりすることができるようですよ。

「……だが私に分かるのはここまで。後は直接レナスに訊かないと……」

申し訳なさそうにリュファス様が言いました。

決して彼のせいではないのに、この腰の低さ。実はリュファス様って苦勞性なのかもしれない。そして、苦勞症になった主な原因は間違いなく、勇者様……

私の心の中に、リュファス様に対する同情の念が湧くのを抑えられませんでした。もつとも、勇者様一行のほうでは私に同情やら憐憫を感じてらっしゃるのでしょうか！

「分かりました。あとはレナス様に伺いに参ります」

私は扉の方にじりじりと下がりながら言いました。

ちようどいいです。レナス様には、この呪いの腕輪の『祝福』について文句の一つも言いたいところですから！

「レナスなら、ミリーと一緒に姫の部屋に向かったようだよ」

私が昼休みに入る前には、お二人はまだいらしていなかったもので、どうやらすれ違ったようです。

「教えて下さってありがとうございます、リユファス様。それでは失礼いたします！」

私は急いで扉を開け放ちながらご挨拶しました。そしてリユファス様の返事も待たず、侍女としてあるまじき勢いで扉をバタンと叩き付けるように閉めると、猫に追われたネズミのごとく猛ダッシュで居間を離れました。本日二度目の逃亡です。

ですから――

安全地帯（姫様の部屋）に向かって走り去る私は、居間でこんな会話がなされていたなんて、夢にも思いませんでした。

* * *

「グリード。楽しそうだな」

微笑みながらグリードに言うファラ。対するグリードは、無表情で、けれどどことなく満足そうな雰囲気を残したまま、目を伏せる。

「……楽しい？ ……そう。これが『楽しい』ということか……」

「嬉しそうでもある。ようやくお前にも人並みの感情が芽生えてきたってことだな。いいことだ」

「『楽しい』、『嬉しい』。……彼女のおかげですね。色々なものをもたらしてくれる」

ファラとグリードのやり取りを、リユファスの緊張を孕んだ声（こゑ）が遮る。

「グリード、あの腕輪の仕掛けは対魔族用か？」

「ええ」

「本当に『天啓』なのか？ だからレナスに『祝福』させたのか？」

「ええ。漠然としたものですが……恐らく、そう遠くないうちに」

「……やっかいだな」

ため息をつくりユファス。

* * *

この時、私はまだ知りませんでした。彼らの戦いが真の意味ではまだ終結していなかったことを。そして、その戦いの渦中に自分がいたことを――

4 土下座は異文化

「レナス様。お話があります。コレについてです！」

安全地帯という名の姫様のお部屋に逃げ戻った私は、そこにミリー様とともに姫様を訪ねていらしたレナス様の姿を発見し、「標的確認、照準合わせろ」的な非常に好戦的な気持ちで左手首を示し、迫っていききました。

挨拶もそこそこに客人に向かつていく私を、姫様や侍女仲間がビックリした様子で見ているのが目の端に映りましたが、気にしてなどいられません。

だって、「死が二人を分かつまで」ですよ？

永遠の愛を誓い合った二人ならともかく、強制的にはめられた腕輪にそれって……。

どちらかが死ぬまで継続しそうな気がして仕方ありません。

しかも外そうとしても外せないなんて、まるでどこぞの呪いのアイテムみたいじゃないですか！ 女神に仕える神官ともあろうお方が、そんなことしていいのでしょうか、と声を大にして言いたいです！

「それは婚約腕輪だね」

レナス様は腕輪に視線を向け、にっこりと笑いながら言いました。

ですが、その黒い瞳が一瞬怯んだのを、私は見逃しませんでした。

レナス様、この腕輪に見覚えがあるでしょう、そうですね。何しろ、ご自分が『祝福』を与えた魔具なのですから！

「そう、そういえはまた言っただけ。婚約おめでと、アーリア。グリードの幼馴染として、そして仲間として歓迎するよ」

しかし私は婚約云々の台詞は完全にスルーし、いかにも取ってつけたような笑顔をつくって言いました。

「お話があるというのは、この腕輪の『祝福』についてです、レナス様。きっちり膝を突き合わせてお話し致しましょう？」

「……」

私の目が笑っていないことに気づいたのでしよう、レナス様の口の端がヒクツと引き攣りました。

——後に姫様から聞いたところによると、この時の私はにこやかに微笑んでいたにもかかわらず、黒いオーラを背負っているようで非常に恐ろしかったとか。

どうもこの時、無理矢理腕輪をはめさせられたこととか、『勇者の婚約者』にジョブチェンジされたこととか、諸々に対する鬱憤がピークに達していたようなのですね。

抗議する相手が違うのでは、という気がしなくてもないですが、問題の張本人へ抗議に行った先で「ビッターン」に遭い、怒りの矛先がレナス様に向かったといえますか……。まあ要するに、八つ当たりなのですが、この時の私は、何しろ抗議しなければという思いでいっぱいでした。

そんな私の様子を察し、きっと幼馴染の身が危険だと思ったのでしよう。ミリー様が慌てて言いました。

「アリア、どうどうどう。落ち着いて！」

勇者様ご一行の一員であられる神官様に、一介の侍女でしかない私がどうして危害など加えられるものか、ということはさておき、ミリー様はとにかく私を宥めた方がいいと判断したようでした。

「これには、マルワナ海溝より深い訳があるの！」

……ちなみにマルワナ海溝とは、チャレンジャーという魔法使いが偶然見つけた、世界で一番深い海の底のことです。

「深い訳？」

「そう。聞くも涙、語るも涙の深い訳が！」

聞くも涙、語るも涙。……それは聞きたいかも。

と思ってしまった私は、多少終わっていたのかもしれない。

私は怒りの矛を収め、その深い訳とやらを聞くことにしたのでした。

気をさせた姫様が人払いをしてくださり、部屋には私と姫様、ミリー様、そしてレナス様の四人だけになった直後。レナス様が開口一番、仰った台詞はこうでした。

「えっと、土下座させてください」

「——はい？」

いきなり土下座!?

私も姫様も仰天したのは言うまでもありません。

「伝説の賢者レン・シロサキの著書によると、土下座は究極の謝罪の方法なのだそうで、

それに^なおもうと思つて。本当はタタミとかいうイグサを敷物状に編み込んだものの上でするのが正式なやり方らしいけど、ここにはないから絨毯^{じゅうたん}の上で……」

そう言いつつ、レナス様は床に膝^{ひざ}をつこうとしてます！

それを止めるでもなく、面白そうに眺めているミリー様。そして、あんぐりと口を開けている姫様。

慌てたのは私です。

妖精族^{エルフ}や精霊は言うに及ばず、魔族以外のすべての人間が信仰している女神を祀^{まつ}る神殿に仕える神官は、女神様の代行者ともされている尊いお方。

その神官様が土下座！

……そうさせているのは私ですよ、そうですね、そうですね？ やれ、と言ったわけではありませんが、結果的にそうなりますよね？

この事実に私は青ざめました。これが知れたら、神官様に対する鬼畜^{きちく}な所業として、神殿から睨^{にら}まれる&石を投げられるに違いありません。

「や、止めて下さい。土下座なんて！ しなくていいです！」

私は泡をくって止めました。

土下座して謝るほど酷い『祝福』を与えたんかい、と頭の片隅でツッコミを入れなが



5 白の司祭

勇者様のお仲間は美形揃い。神官のレナス様も当然美形です。

襟足につくらいの長さの、ややウェーブがあった柔らかかような薄い翡翠色の髪。黒曜石のような漆黒の瞳。グリード様の神々しさすら感じる美貌とも、リュファス様の高貴な優美さともまた違った感じの、美しい容姿をお持ちです。

強いていえば、全体的に柔らかかようなイメージ。いつもにこやかに微笑んでいるご様子は、白い神官服とあいまって包容力を感じます。それはやはり、女神の代行者たる神官様だからでしょうか。

神官様、と一般に言いますが、神官というのは、女神神殿に仕えている聖職者の総称です。レナス様の役職を表わす呼称ではありません。

私の勇者様たちに関する主な情報源である新聞『勇者タイムズ』によると、レナス様の肩書きは司祭です。

神殿における神官様たちの位は、大きく分けて司教・司祭・助祭の三つ。その中でも、司祭様は中核を担う重要な役どころで、女神の威光を遍く伝えるため各地に派遣されます。神官として最高位ではないのですが、その上位の役付である司教様の数がそれほど多くないことを考えると、かなり高い役職であるといえるでしょう。

そして、一口に司祭と言っても、さらに細かく分かれています。位のほどは、身にまとっている神官服によって表わされます。強力な神聖魔法を使えるほど、司祭としての位が高くなるのだそうです。

レナス様の神官服は白で、司祭として最高位の色です。

つまり、レナス様は、司祭の中でも特に力をお持ちなのです。

この腕輪にかけられた阿呆みたいな『祝福』も、そうした力の一つです。

でも、今目の前にいるレナス様は、こう申してはナンですが、偉い司祭としてはずいぶん、その……神秘性も威厳も感じられません。

だって、私の要請で土下座をやめた後の第一声が、

「ごめんよ。僕もあの『祝福』はやバイだろうと思ってただけど、グリードがさあ」
なんていう言い訳で始まったのですから！

口調軽！と思ってしまう私は、この方に対する畏敬の念が徐々に薄れていくのを

感じました。

それはともかくとして、肝心の言い訳の中身なのですが――

勇者様たちが姫様を救って帰ってくる道中、シュワルゼ国第二の都市に立ち寄った時のこと。

宿に着いて早々、グリード様は皆様に、

「注文していた品物を取りに行ってください」

と言つて外に出て行ったそうです。その品物が何であるか知っていた、姫様を除く皆様は青ざめました。なぜならそれは、グリード様の恋の相手、つまり私の意思をまったく無視して注文した婚約腕輪だったのですから。

それを聞いて私は内心、「やっぱり」と思いました。

グリード様は、勘違いされて渡されたのが婚約腕輪だった、みたいなことを言つておられました。やはり確信犯だったんじゃないですか！

絶対に、わざと細工師が勘違いするような依頼の仕方をしたに違いありません。それに、右でもいいものを左腕に着けたのも絶対わざとです！……お・の・れ。

密かに怒りを燃やしつつ、私は話の続きに耳を傾けました。

――その夜、ミリー様とイチヤイチャしていたレナス様のところに、グリード様が突如やつてこられたそうです。

……つて、話の途中でまたまた失礼しますが、ミリー様とレナス様つてそういう関係だったんですか!? 聞いてませんし、気づきもませんでした。

いえない、神官職は妻帯OKですし、レナス様とミリー様は幼馴染ですから、そういう関係でもいけないのではないのですか！

なんか、すごく意外です。お二人が恋人同士だったなんて。例の『勇者タイムズ』には載っていませんでしたし。

でも、まあ、それならミリー様がレナス様をかばう訳ですね。

若干腑に落ちないのは、土下座を止めもしないで面白そうに眺めていたことです。が……そこに何か、お二人の関係の複雑さの一端を見てしまったような、そうでないような……

おっと、話を戻しましょう。

部屋にいらしたグリード様は、イチヤイチャする二人を見ても空気を読まず、レナス様に腕輪を示して言ったのだそうです。

「これに『祝福』を頼みます」と。

仰天したのはお二人です。いいところを邪魔されたからではなくて、腕輪に神官の『祝福』を授けると言われたことに対してです。

というのも、普通、婚約腕輪に『祝福』を授けるのは、神官様の前で男女が結婚の誓いを行なった時なのです。「幸多からんことを」みたいな、気休め的な『祝福』を授けるものなのです。

ところが、グリード様が依頼した『祝福』の内容は――

まずは、あのピッターン。

そして……

「君がこの腕輪と対の腕輪の持ち主、つまりグリードから一〇〇メートル以上離れると、離れたってことを自動的に伝える、お知らせ機能付き」

「――はい？」

「でもって、その時々君の居場所を教える仕掛けも付いてる」

「――はい？」

「そんなことしなくなったって、グリードは精霊を使って、いつだって君の居場所を把握しているだけだね」

「――はい？」

「精霊の力が及ばない場所でも、君がどこにいるか分かるようにしたかったらしい」

「――はい？」

「あ、それと、その腕輪は、君の位置を知らせると同時に、君に何かあった場合は防衛モードに入るから」

「……すみません、どこからツッコんだらいいのか分かりません」

私は顔を引き攣らせました。

というか、ツッコミどころ満載で、「うわああ！」と叫びたくなりましたよ！

私が一〇〇メートル以上離れるとお知らせ機能が働くとか！ グリード様が精霊を使って常に私の位置を把握しているとか！ 防衛モードって何だ、とか！

色々です。すべてにツッコみたいですよ！

だけど、とりあえずこの場で一番ツッコみたいのは、目の前で「僕っていい仕事した？」

みたいに得意げな顔をしているレナス様にですよ！

さっきの土下座は何だったのさ、と私は言いたい！

いえ、それよりもさらに言いたいのには――

「私の人権はどうなるんですかあ!!」

「ぐえっ！」

気がつくくと、白い神官服の襟元をぎゅうぎゅう絞め上げている自分がおりました。

6

天啓てんけい

「もうその辺で許してあげてよ、アーリア」

私がレナス様につかみかかっていると、のんびりとした声がかかりました。ミリー様です。

「レナスはアーリアの人権を無視したわけじゃない。グリードから【天啓】がらみだつて聞かされて、断れなかつたんだよ」

そう聞いて、私は手を緩めました。

……天啓。その言葉には聞き覚えがあります。先ほど居間を訪れた時、リュファス様がグリード様に言っていた、何やら意味深な言葉が確か、天啓でした。

どうやら腕輪のこの仕掛けは、その天啓とやらによるようです。

「アーリア、とりあえず落ち着きなさい」

姫様が言いました。

「まだお二人にお茶も差し上げていないのよ。だから、いつもの美味しいお茶を淹いれてちょうだい？」

「……はい。かしこまりました」

姫様にこう言われては断れません。それに、姫様は私のために言ってくださっているのです。私にとつて、趣味であるお茶を淹いれている時間は安らぎタイムなのです。そのことを知っていて、冷静になれるよう促してくださっているのです。

どうやら私は、いつになくいきり立ち興奮していたようです。

いくら腹を立てていても、神官様の襟首をつかむなど、侍女にあるまじき行為です。しかも、レナス様は国賓なのですから、不敬罪ふけいざいとみなされてもおかしくありません。

私は猛烈に反省致しました。

一〇〇%自分に非があるとは思っておりませんが、興奮してレナス様の首を絞めるなんて、侍女として失格です。この点だけは猛省まうせいすべきです。詰め寄るとかしないで、もつとこう、静かに怒るべきでした。

例えば——そう、レナス様のお茶に世界一辛いやつと言われるリンガール産の辛子のエキスを入れるとか……？

そんなことを思いついてしまい、私は慌てて首を横に振り、その誘惑を退けました。神聖なお茶に辛子エキスだとか雑巾の絞り汁を入れるだなんて、とんでもないことです！

い、いえいえいえ、ダメダメダメ！ 誘惑ダメ！ こればかりは譲れませんよ、私！

葛藤の末、まっとうなお茶を淹れた私が姫様の部屋に戻り、「おいしいお茶なこと」と皆様に褒めていただき、異物混入しなくてよかったと内心安堵した後。

畏れ多くもお客様用のソファに私まで座らせていただき、レナス様とミリー様のお二人による説明が始まったのでした。

——グリード様は【天啓】というスキルをお持ちなのだそうです。

ま、そんな気はしてましたけどね。

多数のスキルだけでなく、そのスキルを発動できる魔力までお持ちだなんて、羨ましい限りです。ケツ。

……おっと、話を続けましょう。

【天啓】とは読んで字のごとく、天、つまり女神様からの啓示です。

でもそれは言葉として示されるのではなく、不意にもたらされる断片的なひらめき、未来に対する予告のようなもので、グリード様曰く「そんな予感がする」といったような、かなり漠然としたもの。

でも、そんなあやふやなものを彼らが重要視するのは、ほぼ外れることのない警告だからです。

同じように、先の出来事を知るスキルとして【予知】というものがあるのですが、イマイチ精密ではありません。【予知】したことによって、そしてそれを口にするることによって、不確定要素が生まれますし、【予知】した出来事は回避することも可能だからです。

未来に起こる可能性の一つを挙げているだけで、【予知】したことによる分岐の未来が発生して……などとレナス様とミリー様は難しいことを仰ってますが、モブの私には、そんなスケールの大きい難しいことは理解不能です。

とりあえず、「スキル【予知】で知ることのできる未来は正確ではないし、その通りになるとは限らない」と覚えておくことにします。

【予知】は外れることもあるのですが、【天啓】で知る断片的な未来はそれとは別で、回避不能なもののだそうです。

グリード様が「そんな予感がする」と言ったことは、ほぼ一〇〇%の確率で現実にかかるし、事実起こってきたらしいのです。

よって、勇者様ご一行はグリード様の【天啓】を重要視するのです。そして、私の腕輪に関しても、その【天啓】があったのだそうです。

あの「ピッターン」と、グリード様から離れると発動する「今どこお知らせシステム」と「防衛モード」とやらが必要になると、グリード様はそんな気がしたのだそうです。ですが、ツッコみたくて仕方ない私です。

だって……あのー、それって適当に言ってるんじゃないですか？

今どこシステム&防衛モードはともかく、どう考えても、あのピッターンに必要性があるとは思えないのですけど？

私と追いかけてっこしている時の楽しそうで嬉しそうなグリード様を見てしまったら、とても女神様の啓示とは思えませんよ？

でもレナス様たちはグリード様のその【天啓】による予感とやらを信頼しているため、一度は難色を示したものの、結局はグリード様に言われるまま、腕輪に例の『死が二人を分かつまで』の『祝福』を授けたそうです。

「いや、君には恨まれるとは思ったけど」

「恨みますよ！」

「だけど絶対必要だつて言われたら、やるしかないでしょ？ なにせグリードの【天啓】だもの」

「私の人権はどうしてくれるんですか！」

「……」

「ちよ、どうして何も答えないんですか！ それに、どうして視線を逸らすんですか、レナス様！」

ちなみに、防衛モードとは何のことか聞いてみましたが、その答えは――

「ゴメン、その辺はグリードの管轄なので分かりません」
でした。

……風前の灯ともしびだった神官様に対する畏敬いけいの念が、一気に消え失せた瞬間でもありました。

――でも本当はこの時、私も薄々気づいていたのです。だからこそ、普段なら訊くはずのことを訊かなかったのです。そして、レナス様もミリー様もそれを口にすることはありませんでした。

どうして、そんな腕輪の仕掛けが必要になるのかを。なぜ、そうまでして私の守りを固めようとするのかを。そして、腕輪の防衛モードは「何に」対して備えられたものであるのかということ。

7 勇者様のことを知りましょう

お代わりしたら異物混入。

私は心の中でそう唱えながら、お茶を飲む皆様を見守っています。

え？ 誰のお茶に異物を入れるかですって？ それはもちろん、言わずともお分かりでしょう？ うふふふふ。

「アーリア、目が据わっているわよ？ 平常心に戻ってちょうだいね？」

優雅な仕草でお茶を飲み干し、カップを受け皿に戻した姫様が言われました。

さすがは我が主です。私の様子に何やら不穏なものを感じたらしく、やんわりと窺められました。

どうやら異物混入は無理のようですね……ちえ。

標的である神官のレナス様は、私の淹れたお茶を「うん、おいしい」と言って堪能し、だけど何か不穏な雰囲気を感じたのか、お代わりを要求することはなく、にこにこ笑顔でこう切り出されました。

「ところで、アーリアとグリードは、お互いを知りましょうということになったわけだけど……」

——お互いを知る。

それは、私がグリード様に求婚された際、広間で言った『ザ・先送り』のための表面の理由ですね。

なぜ今そのことを蒸し返されるのでしょうか？

もしかして、私の狙いがバレバレなので、嫌味でも言うつもりでしょうか。そう考えしてしまうのは被害妄想でしょうか。

「アーリアは、グリードのことをどの程度知っているんだい？」

おっと、嫌味ではなかったようです。やはり被害妄想だったようです。おそらく精神的に疲れているせいでしょう……いろいろなことが立て続けに起きたからねえ。思わず、遠い目になってしまいます。

気をとり直して、質問にお答えせねばなりません——ここ数日、グリード様とはまともな接触というか、お互いを知るようなまともな会話を交わしたことがあったでしょうか……？

答えは「否」です。これでは質問にお答えしようがないではないですか。

仕方なしに私は、知っている範囲のことをお伝えしました。

「ええと、グリード様については、『勇者タイムズ』に載っていた情報ぐらいいは存じております。年齢とか出身地とか……」

グリード様の年齢は十九歳。ちなみに、ミリー様とレナス様とリュファス様も同い年だそうです。

そしてグリード様の出身地は、エリユーシオンの南方にあるラングレアという村。『勇者タイムズ』に載っていたことですし、ご自身が広間で名乗った時、「グリード・ラングレア」と仰っていたことから分かります。

ミリー様の名も「ミリー・ラングレア」です。これはミリー様とグリード様が実は夫婦だったとか、親戚だったとかいうわけではなく、同じ出身地だということですよ。

おふたりは貴族ではないため、姓名を持っていません。

姓を持っているのは、王族と貴族だけです。

私は、曲がりなりにも貴族なので、ミルフォード姓を名乗っています。

ミリー様やグリード様の場合は、狭い村社会の中なら名前だけで問題なかったでしょうが、村の外に出ればそうはいきません。どこの村の○○、と識別できるようにしないと、同じ名を持つ者がいると不便です。

外で名を名乗る時、大抵は、出身地の名称をつけて名乗るのが一般的です。だからグリード様の場合は「グリード・ラングレア」。つまり「ラングレア村のグリード」となります。

レナス様の場合は、「レナス・レフィード」と名乗っているそうです。

レフィードとは、光の女神レフェリアと闇の神アーティラードの名前からいただいたもので、神に仕える者、つまり神官を表わす言葉。神官職に就く者はみな、レフィードと名乗ると決まっております。

……おおっと、大脱線ですね。今は、勇者様について知っていることを話していたのでした。

私は、グリード様の麗しすぎる顔を思い浮かべました。

グリード様について知っていること……他に何かありましたっけ？

ああ、ありましたね。知らなければよかったですか！

「歩く天災、最終兵器でしたっけねえ……」

ため息混じりにそう言うと、レナス様はにっこり笑いしました。

「おお、さすがはグリーードの選んだ人。もうその事実を受け入れているんだね！」

「受け入れてなんていませんよ！」

「ところで、グリーードについて知っているのはそれだけかい？」

「……って無視かい！」

もはや漫才ですね、これは。でも本人たちはボケてるつもりも、ましてツッコミ役を演じているつもりもなく、至って真面目です。……少なくとも私の方は、ですけど。

そんな私のツッコミをスルーして、レナス様は腕を組み、うなずきながら言いました。「ふむ。やっぱりアーリアにはグリーードのことをもっと知って欲しいな。グリーードが持っている君についての情報量に比べると、差がありすぎる」

あのー。今、何かツッコミ入れたくなるようなことを言いませんでしたか？ 私についての情報量とか！ 差がありすぎるとか何とか！

「君にはもっとよくグリーードを理解して欲しいんだ。だけどあいつは、自分のことはなかなか語ろうとしないだろうから、僕とミリーが代わりに答える。何でも訊いてくれ」

「そうそう。私たちよりもグリーードについて詳しいのなんて、精霊くらいなものよ？」

だから、じゃんじゃん訊いて！

私、グリーード様を理解するなんて、永遠にできそうもありません……

なのに、レナス様もミリー様も、さあとばかりに私を見ます。何なんでしょうか、その期待するような目は。質問しないわけにはいかないじゃないですか！

ですが、グリーード様について知りたいこととか、質問など、特に思いつきません。

え？ スリーサイズ？ そんなの私知ってどうするんですか。知りたくないですよ、そんなものは！

そういうことは、万が一血痕……おおっと、結婚です、結婚してしまった場合に知ればよろしいのです。洋服を仕立てる時くらいしか必要ないんですから。

仕方ないので、私はお見合いの席で訊くような事柄を口にしてみました。

「ええと……グリーード様の趣味は何でしょうか？」

非常にオーソドックスな、定番の質問です。

なのに――

「……え、趣味？」

いきなり困った顔をする勇者様の幼馴染二人。お互いに顔を見合わせ、眉をひそめたりしています。……もしかして、知らない？

「えーと、趣味はなし？」

「……その疑問符が付いた返答は、いったい何なんでしょうか……」

「それじゃあ……グリード様の好きな食べ物は？」

私は気を取り直して別のことを訊きました。

けれど――

「……え？　好きな……食べ物？」

「またもや困った顔して見つめ合ってますよ!？」

「き、嫌いな食べ物でもいいんですけど……」

と、つい付け足してみたのですが……

「……嫌いな食べ物……?？」

ああ、さらに困った顔です！　そして困り顔のまま、言いました。

「ええつと、嫌いな食べ物はないよ。好きな食べ物も……なし？」

……だからどうして最後に疑問符が付くのでしょうか、レナス様？

ツツコませてもらってよろしいでしょうか。

知らないのかヨ！　と。

趣味なし、好きな食べ物も嫌いな食べ物もなしだなんて。普通は何かあるでしょうか？

なくとも、何か捻^{ひね}り出せるでしょうか！

例えば、勇者らしく、剣の腕を鍛えることを趣味にしているとかが。嫌いで食べられない物が無いのは結構ですが、好きな食べ物の方は過去にあれを美味しいと言ったとか、お代わりした食べ物とか、何かしらあるでしょうか！

このように、いくらでも捻り出せるものなんですよ。かく言う私も、趣味はと訊かれて仕事でもある「お茶を淹^いれること」と答えた口です。

それなのに、何も無いなんて……それでも本当に幼馴染なのでしょうか。疑いたくなってきましたよ。さっきの「何でも聞いて」的な発言は、いったい何だったのでしょうか。

思わずうろんな目を向ける私に、ミリー様とレナス様は慌てて言いました。

「仕方ないんだってば！　だってグリードは、出されたものは全部食べるし、好きも嫌いもまったく言わないんだから！」

「そう、出されたから食べる、やる必要があるからやる、万事そんな調子で、自分から

『これがやりたい』と言ったことはないんだよ！」

「そ、それは……」

すべてに受け身で、自分を出さなかったということでしょうか。